シンシナティ小児病院での研究生活

Cincinnati Children's Hospital Medical Center
黒田　雅士
徳島大学医学部医科栄養学科

2023年4月より、シンシナティ小児病院医療センター（CCHMC: Cincinnati Children's Hospital medical Center）にて基礎研究に従事しております黒田雅士と申します。この度、2025年度上原記念生命科学財団留学助成に採択いただき多大なるご支援を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。物価高騰や円安が続く中、研究に専念する上で大きな支えとなっております。

私の留学先であるシンシナティは、オハイオ州南西部に位置する緑豊かな都市です。歴史ある動物園や美術館などもあり、治安や物価の面でも比較的過ごしやすく、研究に打ち込むにはよい環境だと思います。所属先のCCHMCは、U.S. News & World Reportの小児病院ランキングで全米1位（2023-24年）を獲得するなど高い実績を有しており、広大な研究スペースと最先端の機器を備えた非常に充実した環境の中で日々研究生活を送っております。また、日本人研究者のコミュニティも非常に活発で、渡米後の生活のセットアップから、研究における技術的なアドバイスまで、多くの諸先輩方に助けていただきました。



グレート・アメリカン・ボール・パーク（シンシナティ）で開催された
シンシナティ・レッズ対ピッツバーグ・パイレーツ 野球観戦

私はこれまで徳島大学医科栄養学科にて、肥満や糖尿病に伴う脂肪細胞の機能変化と、それに起因する内分泌・代謝異常の研究に邁進してきました。学生の頃から助教に至るまで、慣れ親しんだ環境で研究を続けてまいりましたが、さらに違った角度から研究を捉え直し、自分自身の視野を広げたいという思いから、CCHMCの中村能久先生のラボへの留学を決意いたしました。現在は、肝臓由来の細胞外小胞（Extracellular Vesicles）が全身に及ぼす影響について、新たな視点から疾患メカニズムの解明に取り組んでいます。

本稿を執筆している時点で留学から3年が経過し、予定していた期間の折り返しを過ぎました。振り返れば、日本とはスケールの異なる実験（サンプルの準備だけで膨大な時間を要するものも少なくありません）に加え、徹底した準備が求められる毎週のミーティング、そして他ラボやコアファシリティ（共通機器施設）との英語での交渉など、目の前のことをこなしていく日々でしたが、その試行錯誤の過程こそが私の研究者としての視座を確実に広げてくれたと実感しています。

特に感銘を受けたのは、周囲のオープンマインドでエンカレッジングな姿勢です。ミーティングや日常的なディスカッションにおいても、相手の意見を尊重した上でポジティブなフィードバックを行う文化が深く根付いています。他ラボの研究者や技術スタッフの皆様も大変温かく、何か問題に直面して相談に行けば「どうすれば実現できるか」を共に考えてくれる前向きなエネルギーに溢れています。若手を一人の専門家として認め、その挑戦を組織全体で後押ししようとするこの文化に触れたことは、本留学における大きな収穫の一つです。こうした環境の中で、私自身も失敗を恐れず、未経験の技術習得や領域横断的な議論に飛び込むことができたと実感しております。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださり、私の研究生活を多方面から支えてくださった上原記念生命科学財団の皆様に心より深く感謝申し上げます。残りの留学期間も、この恵まれた環境を最大限に活かしてさらなる成果を追求し、一層精進してまいる所存です。